
メイドロボのいる世界

四季式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドロボのいる世界

【Nコード】

N9810Z

【作者名】

四季式

【あらすじ】

主人公がToHeart2の河野貴明に転生（憑依？）します。

01話 テンプレ

突然だが、僕には特殊能力がある。

……あの、可哀想なものを見る目はやめてください。

「中二病乙ww」とか言うのやめてください!?

えーと、どんな能力かというと、『相応の代償を払えば願いが叶う能力』だ。

そこ、地味とか言うな。

この能力、代償が大きければ所謂『奇跡』すら起こすこともできる。代わりに代償も莫大なものになるけど。

まあ、そんなこんなで二十歳くらいまで適当に生きてきたんだが、普段はテストの出題を当てたり、丁度いい電車に乗れたりなどに使っている。

今では代償がある程度なら自分で誘導することができるし、願いに応じた代償がどれくらいかもなく分かるようになった。

そんなある日。

大学へのいつもの通学路の横断歩道で信号が変わるのを待っていると、小学生が待ちきれずに道の途中から渡ろうとしていた。

危ないな、と思った直後、その小学生に猛スピードで突っ込んで

くる一台のトラックが見えた。

自然と体が動いた。

（間に合え！）

小学生を歩道側に思いっきり引っ張り、その反動で僕は対向車線に転がって行った。

すぐ後ろをトラックが走り抜けたのを感じ、なんとか2人とも助かったことに安堵した。

が、

僕はあの小学生が助かることを『願って』しまっていたことを失念していた。

『願い』には『代償』が必要だ。

左側から感じるエンジン音と振動。

僕は尻もちをついていてすぐには動けない。

なるほど、僕はこうやって死ぬのか。

首だけ後ろを向くと、轢かれそうになったせいか、泣きじゃくっている小学生が見えた。

どうやら大きな怪我はないようだ。

まあ、良かったかな？

次の瞬間、雷が落ちたかのような衝撃が全身を襲った。

体の感覚がなくなり、意識が薄くなっていく中で、僕は、死にたくないな、と『願った』。

02話 転生？憑依？

「うああうえうおうあ…」

（知らない天井だ…）

テンプレのセリフを言おうとしたが、上手く発音できなかった。

体を起こそうと思って、ふと手を見ると、小さいぷにっとした手があった。

にぎにぎ。

手を動かしてみると、目の前のぷに手もその通りに動く。

（……………）

おおう。

どうやら転生したようです。

いや、この場合憑依かな？

って、そんなことはどっちでもいい。

どうしてこうなったんだか。

原因は…………… やっぱり僕的能力なんだろうなあ。

願いは『死にたくない』。

代償は『前の体』と『今の体の本来の意識』といったところか。

肉体の死はあの時点では回避不可だったので、意識だけ他の体に移ったのだろう。

(…………この子とこの子の両親には悪いことをしたな…………まあ、そんな悔やんでも何も始まらないんで、新しい人生を楽しむとしますか)

人生、楽しんだ者勝ちです。

さて、まずは『能力』の確認だ。

無いなら無いでいいのだが、有るなら注意して使わないといけない。

また死ぬのは御免だからな。

ふむ、願いは『親が宝クジで10万円が当たる』でいいかな。

3億とかあんまり欲張り過ぎると、代償もとんでもないことになるから。

これなら、まだ取り返しのつく病氣や怪我くらいに収まるからど

うにかなるだろ。

「ん？ どうしたの、貴明ちゃん？」

母上が登場。

うん、言っちゃ悪いが……………普通だ。

髪型も顔の造形も普通としか言いようがないほどの普通さだ。

「お腹すいたのかなあ？ 今準備してくるからね」

そう言つて母親は部屋を出て行つた。

ミルクを取りに行つたのだろつ。

どうやら僕の新しい名前は『貴明』というらしい。

これまた普通の名前だな。

ま、外国人とかじゃなかっただけマシかな。

取り合えず今懸念すべきことは、能力の確認と……………排泄だな…。

オムツとか、羞恥プレイにも程があるぞ。

「ふわぁ……………」

そんなことを考えていると急に眠くなってきた。

精神は二十歳でも肉体は乳幼児。

僕は睡魔に抗えず、そのまま眠りについた。

03話 隣の昼ごはん

そんな感じで暗黒（羞恥）の2年を過ごした僕は、3歳になった。思い出したくない思い出ばかりだけど、この2年で分かったことがいくつかあった。

一つ目は能力について。

調べた結果、これは以前と全く変わりなかった。

2年前、父親――こつちも普通モウな感じだった――が買った宝クジで10万円当たり、その後、僕が1週間ほど風邪をひいた。

他にもいろいろ試したが、代償の恣意的な操作もできたし、程度も相応だった。

ということで、当初の計画通り無茶な願いは意識的に抑えるようにすることにした。

二つ目はこの転生？先について。

どうやらここ、僕が前にいた世界とは別の所らしい。

国は日本だし、言葉や文化も同じなので初めはわからなかったけど、決定的な証拠があった。

メイドロボである。

僕のいた世界では、やつと部分的に人間に似た形に作るくらいしかできなかったが、この世界には人工知能搭載で、動きや見た目も人間にそっくりのロボットがある。

それがメイドロボ―ー業界最大手の来栖川エレクトロニクスが誇るHMXシリーズである。

この時点でここが有名なギャルゲー『ToHeart』の世界、またはそれによく似た世界であることが分かったが、更に重大なことが判明した。

僕が河野貴明、つまり『ToHeart2』の主人公なのだ。

名前に続いて苗字が河野と分かった時はただの同姓同名かとも思ったが、隣の家の表札に『柚原』と書かれているのを見て確信した。

あ、春夏さんはたいへん綺麗でした。

「そしてここは柚原家のリビング。僕はお昼ごはんにお呼ばれています」

「だれにゆってるの？ タカくん」

2歳のこのみちゃんにつっこまれました。

春夏さんは現在キッチンで調理中。その間、このみちゃんの相手を仰せつかっている。

「さて、このみちゃん。何して遊ぶ？」

「んーと、んーと、おままごとー！」

「はいはい。んじゃ僕はお父さん役？」

「うん。タカくんがおとうさんで、このみがおかあさん」

この歳（精神年齢）でおままごとは少し恥ずかしいが、このみちやんの楽しそうな笑顔を見るとまあいいかと思う。

「じゃあ、タカくんがいえにかえつてくるところからね」

「あいよ。えーと、ただいま」

「あなた！　さいきんかえりがおそいわよ！　いったいなにしてるの！」

「え？　ええと……」

「もしかしてうわき？　わたしよりわかいこにむちゅうなんじゃなのー！？」

「はあっ！？」

え、これなんてリアルおままごと？

「いいわけはききたくないわ！　じつにかえらせてもらいます！」

「……………」

「あれ？　このあとは『ごかいだよ。もうすぐきみのたんじょうび

だから、プレゼントをかうためにがんばってしごとをしているのさ
『だっていうんだよ、タカくん』

「……………このみちゃん、これってもしかして春夏さんとおじさんの
まね？」

「うん。おかあさんたちがきのうはなしてたの」

春夏さん……………子どものいるところで何話してるんですか。

「あらあら、タカ君に遊んでもらってたの？」

出来上がった料理を持って春夏さんがやってきた。

「あ、おかあさん！ ごはんなあに？」

「ふふ、今日は……………じゃーん！ ふわとろオムライスよ！」

「わーい！ オムライスだー！」

両手をあげて喜ぶこのみちゃん。

元気だねえ。

「あら？ タカ君、オムライス嫌いだった？」

春夏さんは僕が大して反応しなかったのを見て心配そうに見てく
る。

「いえいえ、大好きですよ。特に春夏さんが作ったものはすごくお

いいですから」

オムライスに限らず、春夏さんが作る料理はそこらの料理人顔負けのうまさだ。

ちなみに、我が母は下手ではないが、まあ人並み程度の腕前で、たまに春夏さんに教えてもらっている。

「あら〜嬉しいこと言ってくれるわねえ。おだててもオムライスしか出ないわよ〜」

ニコニコ笑顔の春夏さんに対して、このみちゃんは頬を膨らませて見るからに不機嫌そうにしている。

え？ 僕何きました？

「おかあさんばかりタカくんにほめられてずるい！」

ああそういうこと。

春夏さんは『あらあら〜』みたいな顔でこっちを見てくるだけで何も言わない。

あ、僕にどうにかしろと。

「えー、そうだな。このみちゃんが大きくなっておいしい料理が作れるようになったらいっぱい褒めてあげるよ」

「うん！ がんばっておりょうりおぼえる！」

あと何年後になるかは分からないけど楽しみにしておこう。

オムライスはたいへん美味でした。

04話 公園

公園デビューというものがある。

簡単に言えば初めて近くの公園に行くということである。

しかし侮る事なかれ、この成否によってこれからの幼少期の生活が決まると言っても過言ではない。

もし幼児たちの輪にうまく入れなかったら、次からは公園に入ることすら難しくなるだろう。

さらに、これから通うであろう幼稚園ないし保育園でも公園グループで集まることが予想される。

するとどうだろう、ぼっちの出来上がりである。

「なにあの子、ひとりぼっちでめっちゃ暗いんですけどー」みたいな思われてしまう。

そんなことにならないためにも公園デビューは必ず成功させなければならぬミッションである。

まあつまり何が言いたいかといえば……。

「このみちゃん、心の準備はできた？」

「うん、うん」

このみちゃんの公園デビューなのである。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。僕の友達もいるしさ」

ちなみに僕は去年公園デビューは済ませてある。

その時友達になったのが――

「おーい貴明、来たのか」

この男の子、向坂雄二だ。

「いやー助かった、俺ひとりじゃ姉貴を抑えきれなくてよ。ん？」

雄二は僕の陰に隠れているこのみちゃんに気づいた様だ。

「誰だ？ このちっこいの」

「この子はうちの隣の子でね。ほらこのみちゃん、自己紹介は？」

そう言うところのみちゃんはおずおずと前に出てきた。

「あの、ゆ、ゆずはらこのみです」

「そっか、俺は向坂雄二、よろしくな」

「う、うん！」

これで公園デビューは成功も同然だな。

なんたつてここのボスは雄二の姉――

「あら、タカ坊に雄二、私のいないところで盛り上がっているじゃないの」

向坂環ことタマ姉なんだから。

その後、タマ姉にもこのみちゃんを紹介したらどうやら気に入られたらしく、今は女の子数人と一緒に遊んでいる。

「最近公園に来ないと思ったら、あの子と遊んでたのか」

「ああ、このみちゃんのお母さんに頼まれてね」

と言いながら公園内にあるベンチに目を向ける。

そこでは春夏さんと他の子たちの母親がおしゃべりしていた。

「ほほう、あの見慣れない美人のひとがあの子びつこのお母さんか」

「そ、柚原春夏さん。料理がとっても上手なんだ」

「うちの母さんより？」

「うーん、同じくらい。和食なら向坂のおばさんだけど、洋食なら春夏さんの方が上かな」

まじでか、と驚く雄二。

向坂家の味は何回かお呼ばれた時に食べたけど、かなりのレベルだった。

それを一部とはいえ越えている春夏さんは、やっぱりすごいのだと改めて思った。

「男二人でなに話してるの？」

いつの間にかタマ姉とこのみちゃんが女の子達から離れてこちらへ来ていた。

「向坂家と柚原家のどちらの料理が美味しいかについて」

「あら、それとっても興味があるわね。どっちが上なの？」

タマ姉の目に剣呑な光が帯びる。

「それが引き分け。和食なら向坂の方が上だけどね」

「そう、それならまあいいわ。それにしてもこのみのお母さんも中々やるわね」

「うんっ、おかあさんのごはんとってもおいしいの！」

「そう、それは凄いわね」

と、このみに対して優しげな笑顔を向ける。

基本的にタマ姉は年下の子には優しい。

弟の雄二やなぜか僕にはその限りじゃないけど。

僕は本来の河野貴明じゃないからタマ姉も特別気に入ることはないと思っただけ、どうやらタマ姉は僕に好意を持っている様だ。

とはいえ、まだまだ子どもだからその好意をちよつとした意地悪としてしか表現できないみたい。

『タマ姉』という呼称もその一環のようで、最初に環ちゃんと呼んだら不機嫌そうな顔をしてタマ姉と呼ぶように強要してきた。

まあこれは年下にちゃん付けで呼ばれたのが面白くなかっただけかもしれないけど。

「なあなあ、そんなことよりも早く遊ぼうぜー。日が暮れちゃうよ」

「そうね、それじゃあ四人で遊びましょうか。このみちゃんは何して遊びたい？」

「えっとね、おままごと！」

結局このあと、このみちゃん得意のリアルおままごとを何故かタマ姉が気に入り、時間になるまで僕は不倫した夫の役をやらされた。

05話 水族館（前書き）

今回は私でもよくわからない話になっています。
ご了承ください。

05話 水族館

To Heart 2のヒロインたちの数人は家庭などなにかしらに問題を抱えている。

それは彼女らが自力で乗り越えたり、将来の河野貴明^{ほく}の干渉によって解決するものであり、決して幼少期に解決するものではない。

だから目の前で泣いているクリーム色の髪の少女を――久寿川ささらを助けるわけにはいかないんだ。

五歳になった僕は誕生日に水族館に連れて行ってもらった。

理由は二つある。

一つはゲームのデートコースでよく登場するところだから。

どんな場所か把握しておくのは決してマイナスではないだろうと思っただのだ。

……まあ、純粹に楽しみにしていたというのもあるのだが。

そしてもう一つは彼女、久寿川ささらに出会えるかと思ったからだ。

もちろん普通なら一回行った程度では、いくら彼女が水族館が好きでも出会うことは不可能だろう。

ここで僕の実力の登場である。

最近まったく使ってなかったが、こういう時にこそ有効活用しなくては。

願いは『久寿川ささらとの出会い』、対価は適当に病気が怪我でいいか。

ということ、能力発動！ とかはしなくてもいいんだけど何となくノリで。

「お父さん、僕両生類が見たい」

というわけで彼女がいそうな両生類コーナーに来ました。

ちなみにお母さんはこのコーナーに来る事を断固拒否して今は別行動をしている。

さらにこの周辺なら自由に行動していいというお父さんのお言葉に甘えて、現在一人で探索中である。

「見つけた」

何故か意外と広い両生類コーナーの中のサンショウウオの水槽の前に、前世ではあり得ないクリーム色の髪の子がいた。

でも、

「どうして、泣いてるんだ？」

彼女はサンショウウオを見ながらも、その瞳から涙を流していた。

「どうして泣いてるんだ？」

今度は独り言ではなく質問として声をかける。

「え？」

「いや、どうしたのかなと思って」

嘘。

彼女があんなに悲しげに泣く理由なんて分かり切っている。

原作知識という反則技ではあるけれど、僕は彼女の事情を知っている。

「お父さんとお母さんが喧嘩して、私、どうしたらいいか分からないくて……」

「ここまで逃げて来たよ」

「う、うん」

もし彼女の両親の喧嘩を止め、不和を解消するのなら簡単だ。

僕の実力を使えばいい。

対価はそれなりにかかるだろうけど、多分なんとかなる。

でも、ここでそれをしてしまう事によって出てきてしまう影響が、僕は怖い。

バタフライエフェクトによって未来が大きく変わってしまうことが、その責任が僕にのしかかるのが、怖いんだ。

だから、僕は彼女を助けるわけにはいかないんだ。

だけども。

それでも僕は彼女を助けたいと思った。

それでも僕は彼女に幸せになって欲しいと思った。

この先にある確定した不幸に遭ってほしくないんだ。

だから、

「大丈夫だよ。きっと君の両親は喧嘩なんてやめて君を探してるはずだよ」

「そうかな」

「そうだよ。だつてほら」

僕が指差す両生類コーナーの入り口あたりで、一組の男女が誰かを探しているような仕草をしている。

「お父さん！ お母さん！」

二人の元へかけていく彼女。

「願いは『久寿川家の不和の解消』、対価は『河野家の不和』かな。あーあ、やつちゃった」

これでこの物語は一部ではあるが本筋から外れるだろう。

でも、それでもいいんじゃないかと今は思う。

だつて僕は生きているから。

物語の『河野貴明』を演じるなんてまっぴらだ。

「とりあえず、喧嘩でもしているだろう両親を諫めにいくか」

06話 河原

あの後。

両親と合流して落ち着いたささらちゃんと互いに自己紹介をして別れた。

ささらちゃんは「貴明さん……」とか呟いてて、これがフラグなのかなあと思いました。

あらかじめ決めておいた集合場所に行ってみると、うちの両親が口喧嘩していました。

「まあまあ、二人とも落ち着いて。場所を考えようよ」

はっ、と我に返る二人だが周囲からの視線は集めたままだった。

その場からすぐに離れ、結局そのまま帰ることになった。

帰りの道中も二人はイラついているようで、ほとんど何も話さずに家に着いた。

「ってなことがあったんだよ」

「それでおじさんもおばさんも元気がなかったのでしょうか」

「それでタカ坊、そのささらちゃんはどうな子だったの？」

「いただただっ！ 怒るのは結構だか俺に八つ当たりするのはって割れる割れる割れるっ！」

数日後の公園。

いつもの三人にこの間の水族館のことを能力のこと以外話してみた。

あれ以来、うちの両親の間ではいまだに冷戦状態が続いていてどうにかできないかと三人に相談してみた次第である。

「そもそも喧嘩の原因は何なの？ それが分かれば解決するかもしれないわ」

「そうだぜ貴明。お前『喧嘩をしていた』とは言ったが喧嘩の原因は言っていないよな」

「それがしょうもない原因でさ、『両生類はキモ可愛いかどうか』だとさ」

「……………それでどうしてこんな喧嘩になるのか不思議ね」

まあそれは能力の対価のせいなんだけどね。

「りょうせいるいつてなに？」

「それはねこのみちゃん、カエルとかのことだよ」

「カエルさんは可愛いであります！」

「私は可愛いとまでは思えないけど嫌いじゃないわよ」

「本当かぁ？ 実は苦手とかっていただただだっ！ 嘘ですお姉様
っ！」

「まったく、この子は一言多いんだから。でもそうね、カエルが嫌
いかどうか確かめるために今日は河原に行きましょうか」

「賛成であります」

と言うわけで河原に来たのだが、カエルどころの騒ぎではなくな
ってしまっています。

「タマお姉ちゃん！」

「おい姉貴っ、いいから戻ってこい！」

現在タマ姉は川に浮いているダンボールの中の子犬を救出するべく泳いでいる。

僕はそんな過去話あったなあと、パニックが一周して逆に落ち着いています。

「雄二、このみちゃんを抑えてろよ」

「は？」

返事を聞く前に僕も川へ入水する。

「願いは『二人と一匹の無事』、対価はこの前のと合わせて酷い風邪にしておこうか」

泳いでタマ姉と子犬のところまで到着。

そう言えばタマ姉犬嫌いだったよなと思い出させるほど彼女の顔は蒼白で、溺れる寸前のようにだった。

無事なのが確定しているので、慌てずゆっくりとタマ姉を引っ張って川岸を目指す。

「無事か、姉貴！ 貴明！」

「ああ、大丈夫だよ。それより子犬は大丈夫？ タマ姉」

「え、ええ、大丈夫みたいよ」

「ワン！」

子犬は思っていたよりも元気そうで、助かったと分かるとそこら辺をこのみちゃんと一緒に走り回っていた。

「ありがとうタカ坊、助かったわ」

「どういたしまして。一個貸しだね」

「ふふ、そうね」

ずぶ濡れで帰ったら怒られ、翌日高熱が出ました。

07話 小学校（前書き）

内容薄いです。

07話 小学校

ざわつく教室の中、僕は小さく溜息をついた。

「まさかもう一度小学校に通うことになるなんてなあ」

というわけで、小学生になりました。

それにしても五月蠅いね、小学生低学年って。

さっきは『ざわつく』とか表現したけど、実際は動物園かと思うほどキーキーキャーキャーと阿鼻叫喚な感じだよ。

オマケに担任の先生は新任らしく、五月蠅い児童を抑えられないでいる。

家庭の事情で最近ストレスマッハな僕としては耐えられないね。

ということぞ、

ダンッ！

机を大きく叩いて注目を集める。

「五月蠅い」

シンとした教室に僕の声が響く。

「さっきからギャーギャーと五月蠅いんだよガキ共が。ああ、先生続きをどうぞ」

「え？ あ、はい。えーと、順番に皆の名前を呼んでいくから元気にお返事してくださいね」

その後、大きい声を出すとまた僕に怒られると思ったのか、ほとんどの子が小さな返事を返していた。

「さっきの、やり過ぎじゃねえのか」

授業が終わり10分休憩に入ると、前の席の雄二が話しかけてき

た。

「ちょっと最近イラつくことが多くてね。クラスの皆には悪い事をしたよ」

「なんだ、まだおばさんたち仲直りしてないのか？」

そう、久寿川家の不和を河野家に移したせいで、両親は未だに冷戦状態を続けている。

これは離婚するのも時間の問題かもね。

原因はしょうもないことだったけど、お互い引くに引けないところまで来ちゃっているから。

「雄二、そろそろ次の授業が始まるぞ。前向けよ」

「ああ、分かった」

午前の授業を終えて昼休みになった。

雄二は他の男子たちと一緒にどこかへ遊びに行った。

僕も一応誘われたけど、他の子たちが怖がると悪いから辞退した。

「にしても暇だな。これは怖がられるの覚悟で雄二について行った
ほうがよかったかもな」

早くも後悔するが、今から行くのもなんだしな。

「……………図書室にでも行くか」

教室に残っていた数人の児童に怖がられながら、僕は図書室へ向
かった。

「まさか小学校の図書室にこんなものがあるとはな。図書の先生も
分かっている」

なんとこの図書室には西尾維新の戯言シリーズが存在していた。

内容的に明らかに小学生向きではないため、図書室の奥の方に置
いていたようだが……………これは読むしかないだろう。

結局、途中まで読んだクビキリサイクルを借りることにしたのだが、カウンターで図書の先生からストップがかかり、借りることができなかった。

「1年生にはまだ早い」だとさ。

確かにその通りだが、精神的には20歳越えしている僕にはそれくらいが丁度いいんだよな。

もちろんそんな事は言えないので、しょうがなく諦める事にした。

………借りることはできないけど読みに来ればいいからね。

そんな感じで小学校最初の日が終わった。

08話 告白

1年が経ち、僕のクラスでの位置づけは『怒らせると怖いけど普段は物静かなやつ』となった。

そのため、友人と呼べるのは雄二の他のはクラスに数人程度しかない。

まあ、小学校の頃は割と誰とでも友達みたいな感覚だから僕が思っているより多いかもしれないけどね。

そうそう、今年からこのみちゃんも小学生になり、一緒に登校している。

春夏さん曰く「タカくんなら安心してこのみを預けられるわ」とのことだ。

そんなこんなで僕としてはそこそこ充実した生活を送っている時に、

タマ姉が九条院に転校することが決まった。

「河野貴明さんへ。放課後、学校近くの神社で待っています。差出人の名前は無し、と」

人生で初めてのラブレターらしきものを貰いました。

雄二と一緒に帰ろうと下駄箱を開けたらこの手紙が入っていた。

雄二は手紙を見るとニヤニヤとしながら「じゃあ俺は先に帰るとするわ」と言って走り去っていった。

「どうしたもんかね」

とは言ってもすることは決まっている。

神社に行つて誰だかわからない女子を振るだけだ。

小学生に告られてもなあ。

などと考えているうちに神社に繋がる階段を登り切っていた。

神社前にいる女子は――タマ姉だった。

「遅いわよ、タカ坊。女の子を待たせるなんでまだまだね」

「そりやすまなかった。それでも急いで来たつもりなんだけどな」

「まあいいわ。……………それでね、タカ坊。私、九条院に行くことになったじゃない？ しばらく会えなくなるの。だから今のうちに言っておきたいことがあるの」

「……………なに？」

「私ね、

タカ坊のことが、好きなの」

「……………僕もタマ姉のこと好きだよ」

「違う。タカ坊の好きと私の好きは違うの。だから同じ好きになるためのおまじない」

そう言ってタマ姉は僕の頭を両手でそっと挟む。

タマ姉の顔が徐々に近づいてくる。

そして――唇が重なるだけのキスをした。

「待っててね、タカ坊。きっとそっちから『好き』って言わせてみせるから」

そう言い残してタマ姉は帰って行った。

「はあ、まさか手紙の主がタマ姉だったとはな。確かに綺麗な字で上級生だとは思ったけど」

だから雄二はニヤニヤしてたのか。

それにしても、この頃のタマ姉に告白されるなんて思ってもみなかった。

しかもキスまでされたし。

…………唇、柔らかかったな。

「じゃなくて、これもやっぱり僕の影響なのかねえ」

原作にはこんなシーンはなかったはずだし。

能力を使わなくても、僕という存在はこの世界に影響を及ぼす。

「どうせ影響が出るのなら、好きな様にやってみよう。できる範囲だけでも知っているからこそできることをやってみよう」

この世界に影響を及ぼすことがどれだけ危ういことか、この頃の僕はまだ分かっていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9810z/>

メイドロボのいる世界

2012年1月14日15時53分発行